

11/25(子) 統一団交に結集せよ

話し合いの場を確保すると称して⑤を導入して以来、50日もたとうとしている現在、この一年にわたる市大斗争の成果は何処に結実したか。また、大学当局は一貫して改革、あるいは「話し合い」と言い続けつつも彼等は一体何をやってきたのか。

諸君！今こそ我々が卒直に過去一年にわたるこの斗争の総括を行ない、自らが果たしてきた役割と責任について考える必要がある。それは、強権的に授業再開がなされ、未だに機動隊が本館、教養学舎の入口にデンと座り、我々の一切の行動を監視されているにがかわらず、こがらしの吹さはじめている此頃、大半が何もなげ？たかの如く日常的活動に埋没しようとしている時であるからこそ一層必要なことである。

我々はなにも一切の日常性を拒否するということではないが、この斗争で向われた「非日常的な日常性」をいかに保持していくかという点で現在が重要なのである。

我々は大学当局に対し、1) 当局の責任を及、2) 全管理機関の公開、というテーマで連日団交を開くよう要求して一か月以上も経過してしまつた。

この連日団交は、大学当局の過去一年間にわたる行動を総括させ、大学改革の姿勢を確認させることである。そしてそこに我々自身の総括をぶっつけ、改革の足掛りをつくっていくことに意義がある。

一切の改革は自らの行動を総括することなくしてはありえない。従つて改革を望まない人間にとつては、そういったことを全く行なわぬであらうし、逆に、種々の口実を作つて改革しようとする人間を圧殺するものである。

まさに現在の協議会の対応はそれである。

7日の公開質問状回答については「顔を洗つて出なおしてこい」といった内容であつたし、10日付「全学への訴え(その2)」では、明らかに我々の団交議長団を指す内容の告示を出して「団交」を求めることのみ急な人々とか、「アトラダムな話し合いの要求」とか「追及のための「追及」集会」とかといった規定をして我々に対応しようとしてきた。

未だに当局の一方納主張のみを一篇の紙切れで全学に押しつける管理者的意識でもつて我々を説得できると思っているのが。

このように我々、学生、若手教員のような無権力者の意見を一切無視しようとしている状況にあつてもなお我々は話し合いを要求しなければならない。

我々は種々の努力を行なつた結果、やっと17日、18日の両日にわたつて予備折衝が持たれた。協議会の予備折衝委員(永井工学部長、兼松工評議員、山崎経研評議員、川口理評議員、藤野原研所長)は全権委任という形で我々に対応したのではなく、単に意見を聞くといったものでしかなかつた。そして我々の議長団について、1) 文科系組織は一切除く。2) 協議会メンバーは有志として参加する。3) 全共斗は除く。との三条件をつけてきた。3) について我々は論理的におかしいと指摘したが軽視を恐れてこの条件をのんだ。

しかし、2) の条件は全く不当であり、形式論から言つても、論理的に言つてもおかしいことは明らかなので再考を要求したが、上に述べた如く全権委任された委員でないので協議会にて他の評議員を説得することを約束させたのであつた。そして最終的な予備折衝を22日に行い、団交の期日として25日を予定することが双方において確認された。

このように種々の向題を含みながらも団交実現に向つていふことを全市大の皆さんに報告し、さらに参加していないクラス・ゼミはこの団交準備会に結集するよう呼びかけた。理学部助手会が正式に組織参加することに決定したので、特に文科系クラス・ゼミが結集され、この団交を実りあるものとするよう期待する。

参加団体は 本日(20日)2時
 団交準備会 に集つて下さり
 工学部 B-525 Tel-3380

工院協